

九七年のことであった。

上述の三角関係におけるカナダの役割は独特である。カナダは、ほかの二国のような工業大国ではない。その夢と目標は、日米と比べてつましい。国際関係におけるカナダの比重も、それほど大きくはない。カナダの役は、調停役、和解役、適切な仲介者というのが多い。したがって、「安定の三脚」に対してカナダ

は軍事的な貢献はしない。カナダにできるのは、経済的、心理的な貢献である。



マーク・ゲイン氏。「ニッポン日記」の著者。現在は「トロントニュース」紙のコラムニスト。

七六年は三十九億ドル、一九七七年は四十三億ドルと、驚異的な伸びをしめしている。もちろんさらにかがやかしいのは

日米間貿易の伸びで、一九七〇年には百五億ドル、一九七六年には二百五十六億ドルに達している。

この膨大な通商は、これら三国を結びあわせるきずなの一つになっている。これはまた、ほとんど必然的に、相似た外交政策をうむ。世界貿易の一員として、三国とも平和を願ひ、国際的な秩序を願ひ、適度に自由な通商の流れを願っている。国連であれそのほかの場であれ、日本、アメリカ、カナダの三者はたがいに

カナダは、アメリカと同じように、日本がよそ者を寄せつけぬほど高いその保護貿易の壁を低くするよう望んでいる。

（カナダの対日投資額五千五百万ドルに對し、日本の対カナダ投資額が六億ドルに達し、しかもさらに増加中だということとは、両国間のアンバランスのひとつの尺度となる。）

カナダとしては、日本が強く必要とし

ている穀物や原材料の輸出を削減しようとは思っていない。ただ日本が、ウラムウムだけでなく、カンドウ型原子炉のような工業製品や、カナダの優秀な技術を生かしたその他の商品も買ってくれるよう望んでいるだけだ。

しかしながら、貿易統計にそのような苦情はでてこない。両国間の貿易額をみると、一九七五年は

三十三億ドル、一九七六年は三十九億ドル、一九七七年は四十三億ドルと、驚異的な伸びをしめしている。もちろんさらにかがやかしいのは日米間貿易の伸びで、一九七〇年には百五億ドル、一九七六年には二百五十六億ドルに達している。

この膨大な通商は、これら三国を結びあわせるきずなの一つになっている。これはまた、ほとんど必然的に、相似た外交政策をうむ。世界貿易の一員として、三国とも平和を願ひ、国際的な秩序を願ひ、適度に自由な通商の流れを願っている。国連であれそのほかの場であれ、日本、アメリカ、カナダの三者はたがいに

協調しているし、またアジア全体またはその大部分が単一勢力によって支配されないよう、その阻止に努力している。さらに、三国は、それぞれ中国とのより密接な関係を求めている。それは、中国の市場としての可能性のためでもあるし、中国がアジアの真の安定をもとめる仲間となるように希望するからでもある。

今後数年間にアジアの動乱が収束に向

かう見込みは、ほとんどない。こうした状況にあつて、東京、オタワ、そしてワシントンの政策決定者は、もつと想像力に富んだ政策と、いっそう密接な協力が強く求められている。

第二次世界大戦以後、日本は、その工業力と飛躍する輸出にふさわしい、ダイナミックで想像力に富む外交政策をとることなく今日に至つた。日本人は、あまりにも長いあいだ、第二次世界大戦で苦しんだアジアの国々からの敵意ある反応に對する恐怖にとりつかれてきた。また、あまりにも長いあいだ、東京は、ワシントンの政策に諾々と従つてきた。

日本はこうした政策を続けるわけにはいかない。アジアにおけるアメリカの役割は変わった。衰えた、といつてもいい。そこで日本は、一大非共産主義国として、アメリカの肩代わりをする方向に持つて

いられるだろう。これは避けがたい運命である。そして、日本からの投資と商品の注文をえることに熱心なアジア諸国の態度から判断して、日本はこれ以上彼らが一九四〇年代の怒りを再発させるのではないかと、心配しなくともいいだろう。同時に東京は、自分を多く恐るべき競争者と戦う商人というよりは、おなじ心を持つ国々のコミュニティーの一員として行動することを学ばねばならない。

アメリカの姿勢にも、変化が必要である。緊密な連携を云々し、さまざまな合同委員会の会合をあれこれ開いても、ワシントンはその外交あるいは防衛上の動向や意図を必ずしもよく東京に伝えない。七〇年代初期のニクソン・シヨック

クとおなじ事態が、ほかの分野でも何回もくりかえされている。その結果、多くの日本人は、アメリカが日本の条件や必要性にそぐわぬ武器や戦略を押しつけようとしていると考えているのだ。

逆に、カナダに対して日本人のうちのあるいは、カナダをあまりにも遠く、あまりにも孤立した、あるいはあまりにも興味のない国と考えている。駐日カナダ大使館はよくその任務を果たしているし、貿易関係者もけっこう成績を上げていて、それでも、カナダは偏狭になりがちだし、通商だけにしか興味を示さず、さらにはアジア情勢の重要な政治的基盤を見落としがちだという感じは、日本人の心に強く焼きついている。この問題は、たびかさなる日加閣僚会議でもまだ解決されていない。

日本とカナダとの外交関係五十周年を迎えた今年、はからずも、アジアでは新たな危機が起こり、悪化しつつある。共産主義諸国間の敵対関係は今後も続き、激化して、アジア大陸各地に多くの影響を及ぼすことはたしかである。この事態は、今後の危機に對処するための一致した政策を、「安定の三脚」諸国が緊急につくりあげていくことを促している。日本はアジアにおいてもつと活発な役割を演ずることをまなばねばならぬだろうし、カナダは太平洋に對してさらに眼をひらかねばならぬだろう。そしてアメリカは、いつてもよく協議し、連絡し、調整するがまえを身につけねばならぬだろう。なぜならば、平和を維持し、アジア大陸をより秩序あるものにしなければならぬからである。